



OPINION

私はこう考える

関一 (財)全日本交通安全協会常務理事

東京大学法学部卒業。1975年、警察庁警務局人事課採用。91年、警察庁長官官房広報室長。93年、警察庁交通局交通指導課長。96年、大分県警察本部長。2001年、長野県警察本部長。04年、中部管区警察局長。05年、(財)全日本交通安全協会審議役。06年3月、同協会常務理事に就任。

飲酒運転を防ぐことで人の命を守る ハンドルキーパー運動を広げたい

お酒を飲んだらクルマを運転しない。当たり前だが、守れない人が少なくない。友人や同僚など周囲の仲間が酒を飲んでいると、その雰囲気気が緩み、一杯くらいなら大したことはない、つい飲んでしまふ。運転できた、警察の取り締りにあうこともなかったというところが、1、2杯までなら大丈夫だろうとなっていく。そして、仲間を乗せてハンドルを握る。飲酒運転による重大事故はこうして起きる。

こうした事態を避けるために、クルマで飲食店に行った時、あらかじめお酒を飲まない人を決め、その人はお酒を飲まずに仲間を自宅まで送る運動を「ハンドルキーパー運動」という。昨年8月、福岡県で起きた幼児3人が犠牲となった飲酒運転による死亡事故をきっかけに、飲酒運転事故の防止を目的として、(財)全日本交通安全協会が警察や関係団体の協力を得て始めた運動である。この運動はオランダで実施されている「ボブ運動」を参考にしている。オランダでは仲間同士や飲食店が「今日のボブ(運転者役の愛称)は誰?」と呼びかけ、グループ内で飲酒しない人を決め、店もこれに協力

するなど、国民の9割以上に理解されている運動だ。

(財)全日本交通安全協会は、ハンドルキーパー運動を国民運動として定着化させることをめざし、運転者側の(社)日本自動車連盟(JAF)、酒類を提供する側の事業者団体である(社)日本フードサービス協会の三者で共催し、また都道府県交通安全協会、安全運転管理者協議会などと連携して、昨年10月27日から、次のような活動を展開している。

- ①ポスター、チラシ等を活用して、ハンドルキーパー運動を国民に周知するための広報活動



ハンドルキーパー運動のポスター

- ②自動車団体、企業など関係機関・団体に対するハンドルキーパー運動への参加の呼びかけ
- ③酒類を提供する店舗に対するハンドルキーパー運動の実践への協力要請

民間主導でさまざまな工夫をしながら展開

関さんによると、酒類を提供するお店には、「お客様がクルマで来たかどうか確認する」「帰りに運転する方(ハンドルキーパー)を確認し、その方には酒類を提供しない」「ハンドルキーパーにはバッジやワッペン、コースターなどの目印となるものを身につけるか、席に置いていただく」「運転代行を依頼する場合にはクルマのキーを預かる」ということをお願いしているそうだ。「ハンドルキーパーとなる方にソフトドリンクをサービ

スするといった工夫をしているお店もあります。すでに、関東、関西の焼肉チェーン店、栃木県の居酒屋グループなどが運動に参加していたいており、さらに参加店を増やしていきたいと考えています。このほか、JA共済では地域の防犯パトロールの際にハンドルキーパーを呼びかける運動、岩手県の銀行や新潟県の信用組合ではマイカーローンを組む際「飲酒運転しない」と誓約書に署名すると利子を軽減するといった飲酒運転根絶に向けた取り組みが始まっている。

関さんは、ハンドルキーパーについて「大事なクルマのハンドルを握り(キープ)、飲酒運転を防ぐことでの人の命を守る(キープする)」という意味を込めています」と力説する。「この運動の良い点は、第1に飲酒は否定せず、飲酒運転を否定していることです。第2は公共交通機関が不便で、クルマで飲食店に出かけざるを得ない地域に適しています。第3には個人の強い意思だけに期待して飲酒運転をやめさせるのではなく、仲間や飲食店など、みんなの協力で飲酒運転を防ぐということです。日本では今までになかった新しいタイプの交通安全運動で、注目を集めています。特に地方などで反応がよく、手ごたえを感じています。」

飲酒運転根絶のために民間団体を中心とした全国的な新しい交通安全運動であるだけに、関さんはこれからも息長く、地道に続けていきたいと話す。「まだまだ、この運動の知名度は高くありません。今年度は飲酒運転の厳罰化などの道路交通法改正にからめて、さらに運動を広げていくつもりです。ファミリーレストランや自動車販売会社などにも協力を働きかけたいと考えています。」

SAFETY COMMUNITY

●地域の交通安全教育



暗いところでは反射材が効果的であることを確認した

交通安全シルバークラウド2007・すずか(三重県鈴鹿市) 高齢者が生活の中で実行できる 交通安全の取り組みを伝える

かりやすく解説。ウォーキングやストレッチ、下駄履き歩きなどで関節の動きや身体の傾きといった情報を脳に伝えて活性化を図ることによって身体機能の低下を補い、交通事故防止に努めることの大切さを伝えた。

フェスタでは、その他に鈴鹿市の交通安全指導員による交通安全の寸劇、交通安全ファッションショー、鈴鹿地区交通安全協会女性部による交通安全音頭などが行われた。交通安全ファッションショーでは、グレー、黒、黄、赤、白、緑色の服を着た5人が舞台上で登場。照明を上げて夕暮れを再現し、白や黄色の服装が目立つことを観客とともに確認した。また、反射材の効果について紹介。明るい服や、反射材を着用して外出するよう来場者に呼びかけた。さらに、会場のお客様から交通安全に適した服装をした2名が選ばれ、鈴鹿警察署の警察官から記念品を授与された。



講演を行う田中誠一・東海大学名誉教授

2月23日、三重県鈴鹿市文化会館で「交通安全シルバークラウド2007・すずか」(以下、フェスタ)が開催された。(主催・鈴鹿市後援・鈴鹿警察署、鈴鹿地区交通安全協会)

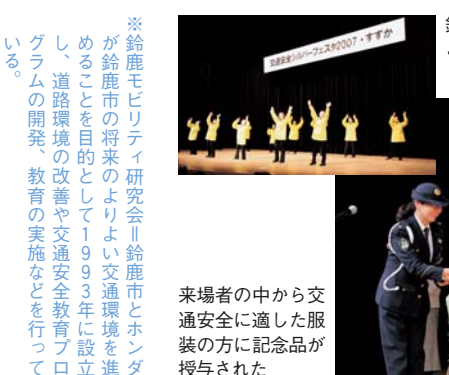
このフェスタは、鈴鹿市全域の老人会のリーダーたちを中心に参加を呼びかけた、初めての試み。開始時刻の午前10時には、多くの高齢者が会場に集まった。

最初に、田中誠一・東海大学名誉教授による「身体機能の低下と交通事故との関係」についての講演が行われた。高齢になると、「若いころに比べて動きが鈍くなり、クルマが近づいてもすぐには避けられない」「背中が曲がり、視野が狭くなってクルマの存在に気づかない」など、交通事故が起きやすくなる。田中氏は、加齢に関わる身体の仕組みを高齢者にわ

交通安全防止の知識を参加者以外にも広げる

鈴鹿市では、鈴鹿警察署、鈴鹿地区交通安全協会、鈴鹿モビリティ研究会などの協力を受けながら、生活安全部防災安全課と交通安全都市推進協議会が委嘱している8名の交通安全指導員が中心となつて、市内の幼稚園や保育園、小学校、各地区の老人会などに出向き交通安全教室を行う活動を続けている。今回のフェスタは、各地区の老人会で行っている交通安全教室をまとめ、交通安全を高齢者に広く呼びかけるために開催された。

鈴鹿市の生活安全部防災安全課によると、高齢者の場合、普段はあまり外出されない方が、たまに外に出た際に事故にあうケースが多いという。そこで、今回のフェスタでは、「ここで学んだことや交通事故の悲惨さなどを、今日参加されていない方々にも伝えていきたい。周りの方々にも伝えていだけたら、このフェスタは成功です。皆さんと一緒に交通事故のない地域をつくりたいと思います」と最後に会場に呼びかけた。



交通安全に合った服装から交通安全に合った記念品が授与された

鈴鹿地区交通安全協会女性部による交通安全音頭も披露された

鈴鹿市では、交通安全のイベントに参加しない高齢者にも「こんな場所で事故がおきやすいんだよ」「こんなことに注意しなければならぬんだよ」といった話を広げていくことが大切と考えている。今後も各老人会組織の活動を活かしながら、このようなイベントなどを開催し、交通事故を防ぐための活動に力を入れていく意向だ。